

---

# どっかのオリ勇者さんがトリステインに転生したよ

論理派青年

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

どっかのオリ勇者さんがトリステインに転生したよ

### 【Nコード】

N56530

### 【作者名】

論理派青年

### 【あらすじ】

どこだここ？

目を覚まして真っ黒な空間に疑問を抱く。

ああ確か死んだんだっけ？

俺は知志武一心。ハイラルで魔王ガノンを倒す、勇者なんかをやつてたりした。

なんか、封印が解けたんだって。で、超頑張つて倒すことに成功。いえゝ…代わりに死にました。

ま、とりあえずここはどこなんだ。

「それなのよね」

こいつは彩<sup>あや</sup>。俺の契約精霊をやっていたりした。

「ここは死後の世界です。」

誰だあんた？

「あなた方にお礼がしたいのです。」

ふん礼ね。じゃ転生チートよろ。

実際はこんなに軽くするつもりはありません

## #00 魔法について（前書き）

作品で出てきたオリ魔法をここで紹介します。  
ある程度の説明も行います。

ただ自分でも意味不明なところあるので適当な理解でいいです。

## #00 魔法について

> i 1 3 3 1 0 — 1 8 6 3 <

これが#01の「魔術を極めた証」です。下はその説明です。

> i 1 3 3 0 9 — 1 8 6 3 <

魔術は精神エネルギー

系統魔法はこれの一部

氣術は肉体エネルギー

ハルケギニアでは見つからない。使える人がいても一般テクではない

靈術は超自然エネルギー

先住魔法はこれの一部。精霊の力などもこれの一部。

知術は精神×超自然で特殊攻撃

力術は肉体×精神 で物理攻撃

勇術は肉体×超自然で変化効果

（これらの力はゼルダのトライフォースを参考にしている。三位一体の考え方である）

上記以外の理を外れたものを外法（そのどれにも属さない）

虚無の魔法はこれの一部で、ガノンが使った力もこれ

上記以外の理に適ったものを神法（肉体×精神×超自然）

使えはするが、リスクが大きい場合が多い。

力関係は （ただし各最高クラスの術での比較とする）

氣術⇐魔術⇐靈術<勇術⇐力術⇐知術<外法<神法

必要となるエネルギーは効果時間によって変わる。

永久＞長時間（1週間）＞中時間（1日）＞短時間（1日）  
＞瞬間

効果時間が長いものほど、詠唱・陣・触媒が必要になる（実力によって変わる）。

詠唱などの事前動作は、消費エネルギーによっても変わる。

例えば明りの魔法を普通に使って10の消費だとしたら、動作なしで行ったら100消費する。

また、因果律を操作するものは、安全措置のため詠唱が必須となる（なくてもできるがどれだけよくても五分五分の成功率）。

## 術共通

### ・ショートカットコード

術式を魔力などによってカードなどに掘り込み、イメージを固定化することで、

必要なエネルギーを込めるだけで術式を発動可能にする方式。

エネルギー消費を半分以下に減らせるうえに凡庸性が高い。

また、これをカードに掘り込んだものをショートカットカードと呼ぶ。

#02の早着の腕輪や飛行する大剣、#03のクックベリーパイなど

## 魔術

### 風系統

#### ・浮遊

レビテーションとフライを組み合わせたもの

## 気術

・同調

他者に氣術を施す際に必須となる術。理由は氣術は基本的に自分を強化するものだから。

ある程度感覚共有が出来る。（エロい意味で使えば……） 無視してください

・肉体活性

肉体器官の状態を最適化する。

ただし、癌の人に使うと癌細胞も活性化してしまうため悪化

・肉体正常

肉体器官の状態を正常化する

・早着

着替えを变身魔法のように一瞬で終わらせてしまう術

普通に使うとエネルギー消費が激しい。

ショートカットコードで何かに登録しておけば消費を1/1000000000に抑えられる

・酔い止め

そのまんまの効果。

知術

・診察

これを行使した相手の肉体の状態を知ることができる。  
スリーサイズとかも分かってしまう…

勇術

・超肉体活性

氣術の肉体活性の強化版で、

効果は肉体器官の常時正常最適化と感覚・運動能力の限界強化。

自分（自分の一部であると認識できたらそれでもいい）もしくは、  
血の契（具体的には処女を…）を交わしたものにしか使用できない

不老不死になるわけじゃない。永久効果。一人一度。詠唱必須。

・過剰経験

努力地二倍「ポモンを思い浮かべてね」。永久効果。一人一度詠唱必須



## #00 魔法について（後書き）

このページにあまり意味はありません。（えゝ？）

## #01プロローグ

”俺は…死ぬのか?”

流れゆく意識の中で考える。

それとも既に死んでいるのか、或いは、生まれてすらいないのか。  
それを知る者はいない。

”誰か…教えてくれ……<sup>アヤ</sup>彩”

そこで俺の意識は中断される。

「…きて、一心!!起きてったら。」

ここは誰だ、俺は何処だ。

何だ…何が起こってる。

「もう…しょうがないわね…こうなったら…」

俺は…智志武一心。そしてこいつは…

「せえの!!」

「やめ、やめ、やめて!!…いくら俺でも痺れるよ!!?」

俺は身の危険を感じて飛び起きた。

頭を軸にし、後ろにはね飛び、数回まわって着地したほどの身の危険だ。

「いや、痺れるで済むのは、一心だけ。」

と、先ほどいた所を見ると、バチバチとさせた張本人を見る。

彼女は彩。俺と契約した精霊で元人間。

というのも、彼女が人間であつたところに、すべての精霊と契約した結果、信託が下り精霊となつたらしい。

精霊としてのランクは最も上。全ての大精霊を統括する、神格位を持った王精霊だ。

彼女に会つたのは15の時。

聖地の封印を解き、神の力を喰つて復活した、大魔王ガノンによって、世界が瘴気に満ち溢れていた頃。

討伐隊であつた俺は、王精霊である彼女の力を借りようと、一級災害指定地ハガルへと向かつた。

その最奥で見たのは、瘴気に充てられ暴走、変質した彼女だった。

必死の死闘の末に、暴走を止めることに成功し、契約。

以後、俺に付いて来るようになった。

「そんなことよりも、此处は一体」

俺たちしかない全てが黒い空間について言おうとして、

「それについては私が説明しましょう」

「「うわっ!？」」

シンクロ率MAXだった。

っていうかなんだこれ、声だけが聞こえてくるぞ。

「結論から言います。ここは死後の世界、つまりあなた方は死にました。何があつたかは覚えていますね？」

一瞬、何を言われているのかわからなかったが、何とか理解して、返事をする。

「ああ。」

く回想く

「これで最後だ!!魔王ガノン!!!!」

俺は退魔の力を持った剣にすべての力を纏わせ、魔王へと突き立てる。

「おのれええ。このまま死んでなるものか!!」

ガノンはそういった後、最後の悪あがきを始める。

魔王の体から光があふれたかと思いきや、黒い塊が体から吹き出てくる。

「拙い!!彩!!!!」

黒い塊は魂。それは新しい「器」を求めて、転生陣を描く。

「ええ」

俺達は、それを阻止するための希望に託すこととした。

「「聖なる力よ!!!わが命を糧とし、悪しき野望を打ち砕け!!!」」

命の焰が消えてゆく、体を構成する様々なものが剥がれ落ちていくのが分かる。

「「ラストジャスティス!!!!!!」」

「最後の正義」それは命と引き換えに悪を滅ぼす力。

”俺は死ぬのか…”

かろうじて残った意識。

”世界は救われたのか？”

分からない。

”誰か…教えてくれ…<sup>アヤ</sup>彩”

そして二人は死を迎える。

〈回想終〉

「で、あんたは？」

「神…いえ、この世界の意志といったほうがいいでしょうか。」

どうということだ？

「あなた方のおかげで、魔王はこの世界から完全に消え去りました。そのお礼をさせて貰いたいのです。」

「具体的には？」

彩が聞く。

「輪廻の輪へ介入することで、あなた方の新しい人生に祝福を与えることができます。」

ふむ。

「条件はこちらが決めていいんだな？」

「可能なことでしたら。」

「私は…そうね。王精霊として、契約精霊として、一心の傍にいたらいかな。あと、霊体化自由でお願い。」

彩が先に言う。

あれ？彩は精霊石化自由以外なんも変わらんのか…それじゃあ

記憶の引き継ぎと、能力の引き継ぎと、容姿も引き継いで…あれ？ほとんど変わらない？うーん、じゃあ潜在エネルギーの無限化なんてどうだろう。

「一つ、記憶と能力と容姿の引き継ぎ。二つ、潜在エネルギーの無限化。これで頼もう。」

「わかりました。この先の干渉はできないので、お二人で頑張ってください。」

「感謝する。」「ありがと。」

穢れなき黒であつた空間に亀裂が走り、光があふれる。意識が一瞬飛びそうになりそして

「おぎゃああ。おぎゃああ。」

生まれた。この瞬間から自我があるというのは、変な感じだが、とにかく俺は新しく生を受けた。

「おお、レイーヌ！生まれたぞ！元気な男児だ！」

「あら、この子の手…」

「なんと！この模様は吉兆に違いない。」

右手の甲にある、彩との契約の記。光と闇を表す大極図の周りに火・水・雷・土・風を表すマークが等間隔に描かれ、それを囲むように正五角形と円が描かれている。

左手の甲には、魔術を極めた証が描かれ、聖三角（正三角形の三辺の中点を線で結んだの、武田のマークとかぜ　ダのトライ　オースとか）の頂点を中心とした半径を

聖三角の一边の半分とする円が描かれ、さらにその周りを大きな円が囲んでいる。

どちらの記も、色がかなりしっかりしていて、そこだけが皮膚とは別のものに見える。

「あーあー。」

えつと声が出ないな…発声練習から始めないとな…

「よしよいい子ね。」

”あのゝ、一心？”



「あー!!」　「うあw!？」

” 頭ん中いい歳した男が、乳吸ってるのもなかなか面白いもんだけど ”

「あー…」　「がーん」

結構グサツときた。ひどい、しくしく。

” ああ!ごめんごめん!!まあ、とにかく私はどうしたらいい? ”

ちなみに念話を使って会話している。声が出るのは、生まれたばかりで体の制御が不安定だから。

「あゝ。うーうーあーあーああゝ。うああうあああ。」　「まあ、しばらく霊体でいいとして、俺の話し相手になってくれたらおく」

” 了解つす。 ”

「うーうああ。うーいうあーあーううああああ。ああ、うあああー」  
” じゃあ、俺寝るわ、フィールドワークでもしといて頂戴。じゃ、おやすみゝ ”

” おやすみ ”

やっぱり発声練習からしないとな。そう思いながら、意識を眠りに落としていった。

## #01 プロローグ（後書き）

えっとここから本編です。

初めてなので、勝手がわからず、表現などもまだまだ甘いところがあると思います。

できれば、そういったところの指摘をしていただけると嬉しいです。

## #02五歳になるまでのあれこれと（前書き）

五歳になるまでの色々を簡単に書いています。

ハルケギニアについてのことと、魔術などに関する考察も書いてます。

無理に、理解しなくてもいいです

あと、母上の設定をカリヌさんの妹ということにしました。

## #02五歳になるまでのあれこれと

「ねえ、一心。」

「ん？」

智志武一心、この世界での新たな名はアッシュ・シャイムーン・ド・ワートワーズ。俺は五歳（身体的に）となった。

「何してるの？」

「……勉強？」

こっちの世界の言語は、当然ながら前世のそれとは違ったが、なぜか理解できた。

生まれてから一か月ぐらい、「あーあーうーいー。」とほえましい（彩談）発声練習を繰り返し、

発声のコツが分かってきて、ついっかかりと両親の前で「父さん、母さん」と言ってしまう、

家がひっくり返ったかと思うほどの騒ぎとなった。

父：クロノ・クロロベルム・ド・ワートワーズが「医者を……水メイジを呼べ……！！！」と本気で喚いていたので、

一度殴って黙らせて、「複雑な理由があって、前世の記憶を継いでいる。」と言ったら納得してくれた。

この際に、彩のことも紹介しており、その後、家族には姿を見せている。

両手の甲の記の事もあったからだと思う。母：イレーヌ・リア・ド・マイヤールは終始、落ち着いていた。母は強し（いいえただの天然です）。

口が動くようになってからはあつという間である。”過剰経験”（勇術。努力地二倍「ポ モンを思い浮かべてね」。永久効果。一人一度。詠唱必須）と、

”超肉体活性”（勇術。肉体器官の常時最適・正常化。感覚・運動能力の限界強化。永久効果。一人一度。詠唱必須）を使うことによつて、半年足らずで歩けるようになった。

（チートですね。わかります。）

それからずっと、この世界の地理・歴史・公民…つまり「社会」を調べている。

ちなみに、この世界では「科学」に代わつて「魔術」によつて支えられている。

一般に「四系統魔法」と呼ばれ、メイジにしか使えないらしい。メイジのほとんどは「貴族」であり血統によつて伝えられるそうだ。

まあ、何故こんな言い方するかというと、前世では、「術」は突然変異により先天的に使えるようになるもので、子には受け継がれなかったからだ。

だから、メイジとして生を受けずとも使える可能性はあるし（ただし前世では六十億人の中で十人もいなかった）、血統によって伝えられるのにも疑問がある。

俺は、この世界に系統魔法をもたらしたといわれ崇められている、始祖ブリミルが何らかのシステムを作ったとみている。（もちろんこの世界の理という可能性もある。）

あと「先住魔法」というのもあるが、これは「霊術」であるとふんではいる。他に、知られていない術系統の「氣術」を含め、全ての術の基礎となる。

詳しい事はまた語る機会があるだろう。

「何の？」

「この世界の。」

「えっと確か、ハルケギニアだっけ。広大なハルケギニア大陸を中心とした世界で、トリステインを始め大小多くの国家が存在する。夜には赤と青の2つの月が浮かぶ。」

文化レベルは中世〜近世ヨーロッパのものに近いかな。魔法が発達しており、魔法を使える者は貴族として敬われ、多くの人々は平民として暮らしている。

でも、貴族には横暴な者が多いから、不満を抱いている平民も少ないと思う。トリステイン・アルビオン・ガリア・ロマリア・ゲルマニアの5か国が

ハルケギニア大陸の西部にあって、ヨーロッパ大陸を南北に長くしたような姿だったね。西方のアルビオンは空飛ぶ大陸で地図の場所には定置していない。

また地図の右辺以東においては砂漠地帯を挟んで『聖地』、『東の世界』が存在するらしいけど、どうなんだろ。まあ、前世の地理に似ているところがあるからあるかもね。

火薬や銃、コークスなどは存在するけど、技術レベルは基本的には手工業レベルで、工業製品を大量生産するという概念や技術はないよね。」

「ウィ ペデ アかよー!」

おっと、思わず突っ込んでしまった。気を取り直して、

「まあ、うんそうだね。ちなみに砂漠にはエルフがいると言われていて、東の世界はロバ・アル・カリイエとも言っね。」

いや、本当に、異世界ではなく平行世界なのかもしれない、前世にも一応魔法あったしw

「でも、そんなことを勉強してるんじゃないでしょ?」

「ん? ああ。今は、色々な噂を纏めたりしている。」

「えっとどれどれ、『ガリアの亡き大公オルレ안의娘は実は双子でその片割れがセント・マルガリタ修道院で暮らしている』ってこれ国家機密じゃないの!？」

「まあ、そうだな。」

ガリアでは双子は禁忌とされ、双子が生まれた場合、片方が”いなかった事にされる”風習がある。これは過去の事件に由来するらしいが…

「で、こんな噂とかいうレベルじゃないのを調べてどうするの？」

「うん。とりあえず、この双子の片割れはほしいな…」

ちなみにセント・マルガリタ修道院は岬の突端にあり、周りは海と荒々しい岩で、竜籠などの空路じゃないと行けないので「陸の孤島」とも言われている。

「いつ、行くの！！？」

おい彩、暇で暇でしょうがないのはわかるが、目をキラキラさせるんじゃない。

「はあ、今日はヴァリエールの三女、ルイズ嬢の5歳の誕生日だろ。俺も5歳になったからとかで、呼ばれてるんだぜ？」

母が、公爵夫人のカリーヌ・デジレ様と姉妹なので毎年呼ばれていたんだが（つまりルイズとは従妹の関係にある）、

複雑な事情があったため（幼児が大人な対応を完璧にしていたら良くも悪くも疑われるだろう）行かなかったのだ。

5歳でも本当は危ない気がするのだが、平均的な魔法修練の開始の



年なので（何がなのでなのかはわからない）、行くことにされた。

「が〜ん。」

「まあ、それが終わって、次の日なんてどうだろう。」

そう言つと彩の目がキラキラキラと、……そんなに暇か？

こんな感じで話をしていると、

「行くぞアツシュ！」

父の声が窓の外から聞こえる。おっともうそんな時間か。

「今、行きますよっと。」

腕輪に掘り込んでおいた、「早着」の術を使いパーティー用のスーツへと着替える。

（早着…着替えを変身魔法のように一瞬で終わらせてしまう氣術だが、普通に使うとエネルギー消費が激しい。こうして別の触媒に着替える服装と同時に登録しておけば消費を1/100000000に抑えられる）

窓枠に足をかけ、すっと跳んだあと、滑るようにして着地する。

「いつみても、不思議なもんだな。これで魔法なしとは信じられん。」

屋敷の5階から飛んだのだが、そんなに不思議か？

「訓練すればだれでもできますよ?」

「その訓練ができるのは一心だけ。」

ズドンッ。

「ずいぶん過激な突っ込みだな。」

頭の上に飛び乗ってきやがったこいつ。いや、飛び落ちてきたと言おうか。

精霊なのでふわふわと降りてこれるはずだろうに。

「行くぞ!」

父は、そう言い、馬を走らせた。母は先に行っているらしい。

彩? 彩は霊体になったら俺にくっついていられる。

俺? 俺はとりあえず、「浮遊」の魔法を入力した大剣に乗って、父の走る馬に合わせて飛行している。

なぜ大剣に乗るかって? 前世での移動手段が、飛行する武器に乗る、もしくは、魔法による転移だったからです。

「もういいや...」

父は考えるのをやめたらしい。

## #02五歳になるまでのあれこれと（後書き）

大剣のイメージをさらに固めましょう。

モンハンで出てくるかなり初期の大剣を想像してください。

飛行する様子は、カービーのエアライドや鋼殻のレギオス（アニメ）の最後の方や、ソウルイーターのキッド君などを想像してくれたらいいと思います。

感想・アドバイスなどなど大歓迎です。（ただし、当然ながら誹謗・中傷・愚痴は却下ですw）

ご指導鞭撻のほどよろしく願います。

### #03 ルイズさん、クックベリーにはまる。(前書き)

えっと、ルイズさんとあれこれ。

カリヌさんの性格描写が全然うまくなく、めっちゃ丸い気がすると思うんですけど、

猫をかぶっているという判断をお願いします。

#03 ルイズさん、クックベリーにはまる。

パーティー会場へ到着。

「了解しました。」

なんか父が執事の人と会話していた。

「アツシュ。これから、カリィヌ様がいらっしゃるそうだ。」

「さいですか。」

なんか「ハア」って感じの反応をしていると、前のほうから桃色がかったブロンドの髪で目付きの鋭い高飛車なオーラが漂う女性がいかに貴族っぽく歩いてきた。

そして目の前まで歩いてきて、

「あなたがアツシュ君ね?。」

と言った。

「え? はい。アツシュ・シャイムーン・ド・ワートワーゼです。」

「ほら、あなたも、挨拶しなさい。」

カリィヌさんがそう言つと、ドレスの後ろからおずおずといった様子で、桃色がかったブロンドの長髪と鳶色の瞳を持つ人形みたいな子が出てきて、

「ね」

る？

「ルイズよ。よろしく。」

「娘とよろしくね。」

カリーヌさんがそう言い、

「頑張れよ。」

父がそう言うのと、二人そろって向こうで手を振っているうちの母のところへ...

「って待てよ!!どっしろと!!?」

”あきらめなさい。”

[illegible]

ごめん、**落ち着いた。**

とりあえずどうしよう、贈り物…は既に沢山貰っているだろう。

しかし、そうだな……ここ貴族達だと宝石だとかそういうた物がほとんどじゃないか？形として残るもの。

発想の転換をしよう。形として残らないもの……つまり、食べ物とか。

なんでだろう…旅行に行った時のお土産の話をしている気分になってきた。

まあ、案外食べ物は悪くはないかもしれない。プレゼントとしては思いい出に残りやすいし。忘れられない味…って感じでw

じゃあなんだ、

?どういつのにする?

.....

女の子+食べ物〃スイーツ。これだ!!

パーティー会場には無駄に豪華な料理は並んではいたが、スイーツはなかった。

?どうやって作るう?

昔、「鍊金でお菓子を作ってみよう」とか言って、研究したことがあったな。

なんか出来た魔法を、ノリで”おかしなお菓子の隊”とか名付けた気がする。

……鍊金を応用しただけのやつだけ。

確かここらへんにショートカットカードが、ござござ、あったw。

クックベリーパイですか。いいですね。

？演出はどうしよう？

えっとどうしよう？

.....

ポケットの中にはビスケットが一つポケットを叩くとビスケットは  
二つ

それ採用！！よし完 璧。

「ルイズ。僕の家に伝わる童謡のひとつなんだけど」

嘘です。前世で比較的ポピュラーだと思われる童謡です。

くアッシュもといー心 singing now

ついでですからどうぞw

「ふしぎなポケット」 まど・みちお作詞／渡辺茂作曲

ポケットの なかには ビスケットが ひとつ ポケットを た  
たくと ビスケットは ふたつ



もひとつ たたくと ビスケットは みつつ たたいて みるた  
び ビスケットは ふえる

そんな ふしぎな ポケットが ほしい そんな ふしぎな ポ  
ケットが ほしい

「じゃあ一緒に歌ってみよう。」

ルイズにはビスケットの部分をベリーパイに変えたものを教えて、  
ポケットの中にクックベリーパイを入れて。

よし。「セーの」

「ひとつ」の歌詞と同時に入れておいたベリーパイを取り出し、

「たたくと」の歌詞と同時にポケットの中のショートカットカード  
に魔力を入れて錬金（作成）

「ふたつ」の歌詞と同時に入れておいたベリーパイを取り出し、（  
以下略）

「すごい。」（キラキラキラ）

うわーすごい食べたそうにしてるな…そいじゃ、ほい。

「あーん」と言ってベリーパイを差し出す。

「あーん」

ルイズが口をあけて、パクツといく。

ん？あれ？俺ってもしかしくなくてもめっちゃ恥ずかしいことしてる？しかもフラグ立てちゃった？え？あれ？

”あんだ馬鹿ね”

”あんだよりまーしよって何言わせてるんだ、この似非精霊が！！”

”ちゃんと精霊してるもーん”

キラキラキラキラ。え？もつと頂戴って？なんだよもう、恥ずかしいじゃんw

「あーん」

くはっ。おねだり…だと！？やばい超萌える。（傍から見たらアブナイ人だった。しかも五歳児）

「あーん」

結局、押し負けて、ベリーパイを差し出す。

パクツ。ハムハムハム…。

萌えーーーー！！！！！！！！と一人身悶えしているアブナイ人（俺）を見ながら、一心不乱にもしかもしゃしているルイズ。

” やっぱり馬鹿ね。この場合変態かしら？w w w ”

” うるさい ”

食べる口の止まらないルイズにベリーパイを5個ぐらい渡しておいで、屋敷の庭にでも行ってみようかなと、その場を後にした。

……後で聞いた話だが、ルイズはクックベリーパイ初だったらしい。そしてなんか俺はフラグを立てちゃったらしい。

### #03 ルイズさん、クックベリーにはまる。(後書き)

どうでしたか？

とりあえず、ルイズにフラグを立てました。

といってもパイの方に夢中だったようなので、分かり辛いかもしれませんが、

フラグが立ったことにしておいてください。

感想・アドバイスなど大歓迎です。(ただし、当然ながら誹謗・中傷・愚痴は却下ですw)

#04カトレアの病気？え、そんなのあったっけ？（前書き）

今回はカトレアにフラグを立てます。（エレオノールは捨てますw）

病気で苦しむ描写もなく終わってしまいますw

#### #04 カトレアの病気？え、そんなのあったっけ？

結論から言おう。迷った！！

Q・どこで？

A・ヴァリエール公爵亭で

説明しよう。

目を輝かせながらクツクベリーパイを食べているルイズを放置し、庭を探し歩いていた俺は無事庭へとたどり着いた。

池に映る双月をしばらく眺め、さあ戻ろうと屋敷に入る。

普段ならどうってこともなく帰れるのだろうが、この時俺は「ルイズ萌えー！！」に陥っていたので、

どうやって庭へ来たのかを正常に覚えておらず、「確かこつちだったはず」と憶測に任せた結果迷った。

” バカね。”

グハッ。ま、まあいいとりあえず手当たり次第だ。

今俺は冒険者だ。最高にテンションハイだぜ

” やっぱリアホね。”

そついいながらも、しつかりと付き合ってくれるようだ。

「とりあえず、ここから。」

ガチャ。

ワン、ニャー、ピー、ブー、ガルルル、フシャー。

……

ばたん。扉を閉める。

え？何？今の。大量の動物がこんな所にいる訳が……。

気を取り直して、

がちゃ。

ワン、ニャー、ピー、ブー、ガルルル、フシャー。

パチパチ、二度瞬いて、ゴシゴシ、目をこすって

「あらあら、面白い反応をするのね。」

女の人がいた。なるほど、動物が沢山いるが、一応部屋だ。人だっているだろう。

「しつ、失礼しました!」

あわてて部屋を出ようとする。

「あら、いいわよ。暇だったんだし。そちらの方もどうぞ。」

ニコニコと笑いながらそう言う。ってかそちらの方？

「あら、私のことが見えてたの？」

見えてたならいいやと彩が実体を現す。

「なんとなくよ？」

なんとなくって…おい、どんなけ勘が鋭いんじゃない。

「あなたは？」

「私？私はカトレアよ。えっと確か……そう！カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンテーヌだったと思うわ。」

自分の名前を忘れかけるって……まあ確かにくそ長いけどな。

「一応、フォンテーヌ又領当主って事になってるけど、ここの次女。」

ん？そーういや何でパーティーに出ないんだ？

「カトレアさんは、パーティーに参加しないの？」

おーう、聞きたいことを先に行ってくれるな、彩さん。



”何年の付き合いだと思ってるの。”

念話で返してくる

”そうでした。”

「三年前に病に罹ってしまつて、まだ誰にも治せたことがないの。だからほとんど部屋暮らし。」

そう言つてるカトレアさんは諦めと寂しさの入れ混じつた感じだつた。

「診たげたら？あんなら治せるんじゃない？」

「そう…だな。やってみるか。カトレアさん。俺に診させてくださいますか？」

「あら、お医者さんごっこ？いいわよ。」

カトレアさんは誤魔化すようにニコニコと笑いながらそう言った。

「失礼」と言つてから、カトレアさんの手を取る。

「カトレアさん。」

「何？」

「今から僕がすることは、誰にも話さないでくださいね。」

「……わかりました。」

「いきます。……”診察”」

”診察”とは、相手の肉体の状態を”識”するための知術。（邪な意思？……（汗）僕知らないよ？）

こんなまどろっこしいことをせずに、”超肉体活性”を使えばいいんだが、それは自分もしくは血の契を交わしたものにしか使用できない制約があり、

その格下の”肉体活性”（氣術。肉体器官の最適化。）を使っても、

癌の人にそれを使ってしまった場合、「正常な細胞」から生まれた「癌細胞」まで活性化してしまうので、治療時にはこれを使っていいかを先に調べる。

その結果わかったことは、将来このまま育てば巨乳と化するだろうということ……じゃなくて！！（心なしカトレアさんの目が痛い気がするよ）

”変態”という突込みは無視しておく。”ちょっと”と無視されたことに対する言及も無視。うるさいこっちは集中してるんだ。

”あんたは遊びでもいけるだろ……”

”治療行為は初めてなんだ。さつさと黙れ。”

つとまあ、話がそれかけたが、

やっぱり癌の類だった。（正確には癌ではない）このまま”肉体活性”を使えば一時的に健康を取り戻すが、一週間後に死んでしまう。治す方法？当然あるに決まっている。こんな時のために（使ったこととはなかった）”肉体正常”（氣術。肉体器官の正常化。）を開発してある。

え？素直にそっち使え？あ、うんそうだね。今度組み合わせておくよ。前世じゃ、病気になる奴、周りにいなかったからな。そもそもものそういったものに対する耐性がみんな強すぎたのだ。

「”同調”」

”同調”とは、氣術を他人に施す際、必要となる氣術である。（氣術は基本的に自身を強化するの術だから）

ある程度の感覚の共有が出来、邪な意思を持って使えば……げふんげふん

”やっぱ変態ね。”

そんな風に使ったことはないと真実の女神にかけて言えます。

「”肉体正常”」

カトレアさんの体のおかしい所が見る見るうちに修正されていく。増えすぎた細胞はそぎ落とし、狂った器官は正しく戻し、削れた体を再生していく。

さつき分かった事からの推測だが、恐らく力任せな治療が施されていたのだろう。癌の成長を促進し、それどころか強すぎる魔力で肉体を削っていた。

「いつ死んでもおかしくない状態なんだが、彼女自身の精神エネルギーによって寸での所で止まっていたのだろう。」

治療をあきらめるのがもう少し遅かったら彼女は死んでいたかもしれない。

「“肉体活性”」

正常な肉体へ戻ったとは言え、体の疲れは取り残される。つまり免疫の低下、筋肉の疲弊など療養生活をしていた結果の“疲れ”を治していく。

これで大丈夫なはずだ。

「終わりました。成功です。調子はどうですか？」

そこで集中を解き、同調を外す。ふっとカトレアさんの顔を見ると心ここに非ずといった感じだった。

「カトレアさん？」

そう呼びかけると、意識を取り戻したかのように驚き

「ええ、大丈夫。なんだか、体にあった寒さがなくなったみたいな感じ。」

と、笑顔で語った。

「よかった、治療は初めてのことだったので、うまくいくか心配だったんです。」

「ありがとう。うれしい！」

なんか飛びついて抱き着いてきた。男なら嬉しい場面なんだけど……

「五歳児が、十三歳女に抱き着かれてる…シュールだ。くふっ、はははは。」

なんか本気で笑い始めた。

「カ、カトレアさん。ととりあえずパーティーに行きましょう。」

「ええ！」

いつになったらこのテンションは収まるのか…

「自業自得よ。」

「黙れ、鬼畜毒舌精霊が。」

「あんた相手だったら誰でもこうなるわよ…」

#### #04カトレアの病気？え、そんなのあったっけ？（後書き）

カトレアの性格ってどうなんだろう？

よくわかんないな…ぼわぼわしたイメージ？

とりあえず、カトレアさんの性格については適当に解釈してください。

感想・アドバイス等あればお願いします。

## #05フラグが婚約に進化

やあ。パーティー会場にただいま。

いや〜慣れないことってしちゃダメだね。

カトレアさんの誘導で見事（じゃなくて普通）に戻って来れた。

「お母様〜！！お父様〜！！」

カトレアさんが両親を見つけたようだ。なんかぼわぼわとしたオーラを放ちながら、手を振っている。

「カトレア！？」「」

両親そろって一瞬で飛んできた。いやほんと読んで文字の如く、一瞬で。瞬きして目を開けたら目の前にいたね。

「うおお！？」

これには俺が驚くこととなった。

”落ち着け”

彩さんありがとー。ちなみに、今は姿を消してもらっている。

「カトレア、出歩いて平気なの（か）！？」「」

「ええ。この子…あれ名前を聞いてなかったわね。」

「アッシュ・シャイムーン・ド・ワートワーゼです。」

速攻で返事をする。

「平気です。だって、アッシュ君に治してもらいまし」

言い終わる前に

「本当かカトレア！？どこか痛いところは、疲れてないか！？」

公爵様。親バカスキル発動。

「「落ち着け（きなさい）！！」」

俺のジャンプ突っ込みと、カリィ又さんのゴージャス突っ込みが同時に入る。

「ふおお！？」

あと少しで、床とキスしてたな。

「それで、本当なの！？」

母君も親バカ様でしたか…

「ええ、本当です。なんなら別の医者に診てもらってもかまいません。」

「おお、おお！神よ！ありがとうございます。」



公爵様、治療したのは俺です。ってこた俺は神か！？いやちゃうな  
…まあ神（魔神）なら前世で数百と殺しているんけどな…

「アツシュ殿！！。」

「殿」と来ましたが、カリヌさん。

「なんでしょうか？」

「カトレアを婚約者としてもらってください！」

手を握り、ものすごい剣幕で迫ってくる。ちょ、顔近いです。

まあとりあえず……………奥さん正気？

「…………えつと公爵様は？」

聞いてみると、

「もちろん不満などない！！むしろ、アツシュ君以外には嫁にやらん！！！」

まあ、不満はないが…（光源氏的な約束はされているから）

「…………えつと、カトレアさん？」

恐る恐る、聞いて

「嬉しいっ！」

むぎゆ。ふおうつ、なんか柔らかいものが！？顔にあたってるよ！  
！将来さらに大きくなるであろう柔らかいものが！顔にあたってる  
よ！！

”

.....

”

ぞくう！？何だ、今の（冷ややかな）視線は。

そう、今の感じを表現するならば、蛇に睨まれた……いや、龍に睨まれた蛙という感じだ。

”  
变态。  
”

ふぐお。

[illegible]

「媚殿？」

もうすでに婿なんかい…。

「な、なんでもありませんよ。」

ちよつと、睨まれてるだけでひええ！？

なんか、カトレアさん、彩さんと睨み合いをしているよ！？何か黒いオーラが飛び交ってるよ！？今ならストレスで禿げれそう！！

「かかかカトレアさん!?!」

「なんでもないわ。」

ぼわぼわした感じで返してくれるが、怖いこわいコワイ恐いコワイ  
笑顔が怖いよ!?!

「で返事を聞かせてくれないかしら?」

今すぐですか!?!なんか、テンパってしまっておもわず、

「ところでルイズは...」

と言ってしまったのがいけなかったらしい。

「ルイズも貰ってくれるのですか!?!」

とか返ってきて、しかしそこへ父クロノがやって来た、

「父上!!父上はどどうなんですか!?!」

「お、アッシュ。手が早いな。」

NOOOOOOOOOOOOOOO!!

極めつけに、

「あっしゅ!!」

とか言いながら、俺に向かって走って来てDIVE!!をしてくれ



## #05フラグが婚約に進化（後書き）

あれ？ハーレムになるかも…

つてか、もとよりその気ではあったけど、この先の展開が読めないからな

ちなみに彩さんはちゃんとヒロインです

感想・アドバイス等あればお願いします。

## #06 ジョゼット救出？作戦？（前書き）

ごめんなさい調子乗ってました。

なんか、話がぐちゃぐちゃで何が何だか分からなくなっていたので  
とりあえず、頑張って、シリアス修正出来たらな〜と思っています。

## #06 ジョゼット救出？作戦？

燃え尽きたぜ…真っ白にな……

なんか、婚約がどうとかのあたりから全く記憶にない。

ルイズにパイを要求され、作りまくったり。

……ショートカットカードのおかげで消費が抑えられたとはいえ、それでも魔力の1/3は使った。

上機嫌になってなんかテンションがおかしくなったカトレアさんに、ワインを飲ませられまくったり。

……彼女には今後一切酒類を飲ませないと誓った。飲ませるとしても、アルコール抜きにしなければ……

同じくテンションが限界突破していた親バカカルテット（四人組）と飲み比べという名の戦闘をしたり。

……超肉体活性で肉体を超強化しているのに、死にかけた。

っていうか、実質酔う事はなくなったはずなのに酔った。

おかげで、人生初（前世含む）の酔い止めの氣術を使う事となった。

現在、ヴァリエール公爵邸から少し離れた所の草原

やっとパーティーが終わって、まだテンションが高い連中から死に物狂いで逃げ出してきたところだ、

気配遮断系使つてもよかつたが、正直振り回されっぱなしで、錯乱していたためそこに思い至らなかつた。

「何やってのよ、さっさと行くわよ。」

グーグー?... あー!?!?..?

説明します。現在テンションマックスの彩さんが風精霊の力を使つて、俺っちを大空へ強制連行しております。

「待て待て待て！！一体どこに行くんだ！？」

ん？なんか忘れてる気がしなくもない…が、

「双子の片割れに行くんじゃないの？」

現在上空。吹き荒れる防風やらなんやらで多少聞き辛かったけど、何とか聞き取れた。

「あゝ、思い出した。なんか、終わったら行く」とか言っていた気がしな「でしょー。じゃあレッツゴー!!!!」キャ!!!!」



俺のつぶやきは、突風によって中断させられた。

風魔法だけでマッハ超えるとか…何それ怖い。

とにかく、二つの月を眺めながら雲の上を（超高速）飛行するのだ  
った。

安全な空の旅……………

おう。おえ…

現在地点、セント・マルガリタ修道院上空。

「まんま教会じゃねえか。」

空中での姿勢制御を取り戻し、荒ぶる鷹のポーズ！！とかバカな  
ことをやりながら、そう言った。

シンボルまで十字架だった。

本土との距離はかなりあって、向こうからでは見えないだろう。

泳いで渡るなどという考えは普通は思いつかない。（俺はできるが）

目測で大体バチカン市国くらいの広さの円型の島で、その全体を使  
って修道院が立っている。

修道院といっても、中で畑ゾーンや住居ゾーンなどがあり、自給自

足でやっていけるようになってる。

ここは一種の監獄のようなものかもしれない。

「さっさと行くか。」

「そうね。」

そう言うってから、空中での姿勢制御を解除する。

いわゆる自由落下だ。

ちなみに、腕を組んで空中逆立ち――！とかやっていたため、頭からの自由落下だ。

修道院の屋上に向かって、頭から落ちていき、頭で着地した。音も立てずに。

周りから見るとこんな感じだろう。

なんか逆さで落ちてきた男の人が、屋上に頭をぶつけるかと覆った瞬間止まった。

って感じ。

種明かしをしよう――！！

超人的な肉体で、（超人的な）受け身を取っただけだ。

ついに物理法則を超えた――！！ってわけではないが――

「何アホな事やってんのよ。」

「いやゝ。なんかついやってみたくなつて。」

アホだった。

「ま、さつさと行こつぜ。」

ガチャ。

ドアが開く音がする。

ガチャ？

先に言っておこう。ドアを開けたのは俺ではない。

「私でもないわよ?」

二人して首をかしげる。そして音がしたほうを見てみると…

「!？」

…なんか驚愕してる女の子がいた。

黒い修道服に身を包んだグレーの髪を持った女の子（幼女）がいた。

って言うか、叫びそうになつてゐる!？

俺は神速で動き、その子の口を塞ぐ。

変な意味でとるなよ？手で蓋をただけだからな？

「驚かないでくれ。俺たちはここに人を探しに来た。」

そう言つとコクコクとうなずく。

おーけー。大丈夫だろう。

手を放す。

「どうすればいいでしょうか。」

少女は片言で聞いてくる。

「そうだな…ここで一番偉い人に合わせてくれ。」

「わかりました。こちらへ。」

「待て。俺は一心、あいつは俺の従者で彩と言つ。お前の名は？」

一応、アッシュの名前は伏せておき、彩は…別にいいだろうと判断。

「私はジョゼットと言います。」

「分かった。案内してくれ。」

後で、この子が双子の片割れだと聞いた時にはマジで驚いた。

廊下に二人の足音が響く、彩は浮遊しているので足音はならない。

石造りの建物で、廊下は何の飾り気もないものだった、

あるとすれば、柱の装飾程度か。

窓のある廊下は、月明かりなどでそこまで暗くはなかったが、

建物の内側の廊下…つまり窓のない廊下は暗く、飾り気のない石造りの廊下ということもあって、何かが化けて出そうな雰囲気を感じ出していた。

コンコン。ジヨゼットがドアをノックする。

「院長。客人です。」

「通しなさい。」

ガチャ。ぎぎぎぎぎ。

場違いな音に多少ビビりながらも部屋の中に入る。

立派な机と立派な書類棚以外、ほとんど何もない部屋だった。

「失礼します。」

一応、礼をしてから部屋に入った。

## #06 ジョゼット救出？作戦？（後書き）

ん。後1・2回で救出？作戦を終わらせるつもりです。

修道院のイメージが思い浮かばない……

うまく描写出来たかが不安になってきますが…

まあ気付いたことあれば言ってください。遠慮なく。

アドバース・感想等貰えればうれしいです。

これからも頑張ります。

## #07 ジョゼット救出？作戦？（前書き）

シリアス修正……出来てない気がする

もうなんともなれ！

## #07 ジョゼット救出？作戦？

「初めまして。」

「初めまして。」

「初めまして。私はここで院長をやっているメイと言います。」

此処の一番偉い人…メイさんは以外にも？若い女性の人だった。

まあ、表現するなら、普通の美人だ。普通の。

人によって、普通の美人っていうのは違うかもしれないが、

何処にでもいる、ただの美人だ。

……………この話はここまでにしよう。

「用件をさつさと話そう。」

「聞きましょう。」

五歳児（見た目だけ）が作る空気ではなかった。

「俺たちがこの島へ来た理由は一つだ。

亡きオルレアン公の双子の娘が妹を貰いに来た。」

「！？」



「何故それを知っているのか？っていう顔をしているな。」

風に噂を届けてもらったただけだ。ただの魔法だよ。」

”風の噂”という風系統の魔術で、様々な情報をランダムに風に任せて、聞き取る魔法だ。

村のAさんに子供が出来た。とかいうどうでもいい噂や、

ダングレテールの虐殺はリッシュモンの仕業だ。などという重要な情報までなんだが、

いかんせん、世の中の情報のほとんどはどうでもいいものが多い。

九割九分九厘以上どうでもいい噂だろう。

まあ、ただたまに。暇だな〜って時に聞いてみると案外、国家機密とかが漏れてくることがある。

効果範囲は一応あるが、三王国とロマリア、ゲルマニアはカバーできる。

一応ただの暇つぶし魔法だが……

「それよりも、亡きオルレアン公というのは……？」

「へ？知らなかったのか？さすがに知ってると思ったんだけど……

まあいい。奴は死んだよ。ガリアの無能王に殺されたらしいって言う噂があるが。」

「そんな……」

どういふ関係だったのかは知らないが、それなりに良くしてもらってたのだろう。

「で、妹はどこにいる。」

誤解を招きかねない言い方だった。

「お待ちください。その子を引き取った後、どうなさるおつもりですか？」

メイさんは俺の目を真っ直ぐ見ながら言った。

「俺の妹としてうちの養子になってもらう。人並みの幸せは保障しよう。」

俺も彼女の瞳を瞳の奥を見ながら言う。

「……………」

「……………」

しばらく無言の時間が続き、そして、

「ジョゼット。首飾りを外しなさい。」

メイさんが後ろに控えていたジョゼットに話しかける。

「で、ですが院長……いいのですか？」

首飾り……ロザリオとも言おうか。それは二度と外してはならない物らしいが……

「かまいません。外しなさい。」

「は、はい。」

ジョゼットが手を後ろに回し、少しかちやかちやいじって外した瞬間、彼女の姿が変わった。

髪の色は青、顔だちは幼く変わり、背は……あまり変わっていないかったが。

「そついうことが……」

結構驚いた。

まあ、首飾りに魔法が組み込まれているのは気づいていた。

……何の魔法かは気にしてなかったためわからなかったが。

「はい。この子がオルレアン公の双子の娘の妹です。」

「……貰って行くぞ。ああ、もちろんただとは言わない。」

俺は、ここにいる人全員に自由をやるう。それを約束する。」

再び、見つめ合う。……もちろん変な意味じゃなく。

「……わかりました。ジョゼット。この方と行きなさい。」

「いいのですか!？」

喜びと躊躇いの混じった声をあげるジョゼット。

「いいんだよ。お前にはその権利がある。俺が保障しよう。」

ジョゼットの前まで行き、顔を見つめながらそう言う。

「またなメイ。あ、名前を言い忘れていたな。俺はアッシュ。もしくは一心。どっちかで呼んでくれ。ちなみにこいつは彩という。」

「じゃあな」

俺はジョゼットの頭に手を置き、そして、転移魔法を使った。

移動先は家の自室。

……ちなみに霊術。行ったことのない場所には使えず、一番多く居る所には、エネルギーを必要としない。

部屋には鬼(母)がいた。心配を通り越して怒っていた。まあ、心もといアッシュの結末は、想像に任せよう。

## #07 ジョゼット救出？作戦？（後書き）

全然五歳児らしくない……主人公はいいとして、ジョゼットが。

……修道院の教育レベルが暇すぎて高かったってことにしといていい？

っていうか、今回は話がつかってないというか、なんていうか、

自分でもなに書いてんのかわからなかった。

だから、今回は大目に見てくれ。

次から頑張るから。　こつ言う奴に限って……

感想、アドバイス等お待ちしております。

今回は切実に、バシバシ指摘して頂戴。

話のつながりが見えない所とか、いやマジで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5653o/>

---

どっかのオリ勇者さんがトリスティンに転生したよ

2010年11月4日22時37分発行